様式 D5 号

博　士　論　文　要　旨

題　　目　終末期がん患者の家族が生きる他者との関係性の様相

Aspects of Relationships with Others of Families

Taking Care of Terminal Cancer Patients

指導教授　　牧野　智恵　　教授

入学年月　　平成 18 年 4 月　入（進）学

学籍番号　　0607604

氏　　名　　加藤　亜妃子

要旨

Ⅰ．序論

終末期がん患者の家族は、患者にとって最も身近な援助者であるとともに、患者と同様に様々な問題を抱え、苦悩やストレスを体験している。これまでの研究では、患者の家族が体験する苦痛やストレス、ストレスへの対処方法や影響要因について明らかにされている。また、他者の存在や支援のありようが家族の対処に大きく影響し、がん患者の家族にとって、信頼できる医療者の存在、気持ちを理解し協力してくれる他者の存在、患者との絆など、他者の存在が重要であることを示した研究がみられている。しかし、終末期がん患者の家族が他者とどのような関係性を生きているのかについての経験を明らかにした研究はない。

Ⅱ．研究目的

本研究では、終末期がん患者のそばに主につきそう家族が、様々なストレスを伴う状況において、他者とどのような関係性を生きているのか、その様相を探求することを目的とした。

Ⅲ．研究方法

研究デザインは、現象学的方法論に基づく探索的記述研究である。

データ収集はインタビューによって行った。家族に対し「最近の患者の看病を行う中で他者から支えられたり助けられたと感じた経験はあるか」という質問からはじめ、家族が周りの他者とどのような関係性を生きているのか、家族の関心に合わせて自由に語ってもらった。インタビューでは、研究者の自然的態度をできるかぎり「括弧入れ」し、現象学的態度で臨み、ありのままの対象理解に努めた。

本研究では、Thomas ら（Thomas & Pollio, 2002）が使用した現象学的アプローチの研究ステップに基づいて解釈を行った。解釈過程は以下のようにした。①研究協力者によって語られたインタビュー内容の逐語録を作成し、繰り返し読み込み全体的な印象をつかんだ。②逐語録から、研究協力者にとって「図」（研究協力者が外（他）のものから抜きんでている出来事として経験された事柄）となる他者との関係性の記述を意味単位で取り出し、研究協力者の経験を記述するなかで重要な事柄として繰り返し起こっている記述のパターンを集め、テーマをつけた。③全研究協力者の記述を何度も見返し、類似性のある経験を表すテーマを集め、大テーマを導き出した。④終末期がん患者の家族が他者とどのような関係性

を生きているのかについて経験世界の様相を導き出した。解釈過程において、現象学的方法論による質的研究に携わる研究者 2 名にスーパーヴァイズを受け、研究者の解釈の妥当性や結果の示し方などについて示唆を得た。

倫理的配慮:研究者の所属施設と研究協力施設の倫理委員会の承認を得た後実施した。研究協力者に対し、研究への協力は自由意志であり協力しなくても不利益を被らないこと、承諾した後でも中止できる権利、守秘義務などの倫理的配慮について説明し同意を得た者に行った。

Ⅳ. 研究結果

研究協力者となった家族は、緩和ケア病棟に入院する終末期がん患者に主につきそう家族 15 名(女性 12 名、男性 3 名)であった。患者との属性は、配偶者 11 名、娘 2 名、兄弟 2 名であった。以下、【】内は大テーマ、〈〉内はテーマを示す。家族の語りの逐語録を解釈した結果、【自分から壁をつくり孤独を生きる】【自分の安寧を感じられる関係を求める】【自分がとらわれていた苦悩から解放される】という家族が生きる他者との関係性を構成する 3 つの大テーマが抽出された。

本研究のすべての家族が、【自分から壁をつくり孤独を生きる】といった経験をしていた。この中で家族は、医療者、患者、他の家族、友人などに対し、不信感をもったり、遠慮する中で、〈自分の気持ちを言えない〉と感じ、他者の何気ない一言に傷つき〈他者の反応に敏感になる〉経験をしていた。そのような状況の中、他者のねぎらいの言葉も家族には届かず、〈心通う話し相手がいなくなる〉と感じ、他者に対し自分から壁をつくり閉ざされた関係性の中で孤独を経験していた。しかし、家族の中には孤独を感じながらも、〈慰めや励ましを求める〉〈自分が信頼できる人を求める〉という自分の独自の方略を用いて選択的に他者との関わりをしながら【自分の安寧を感じられる関係を求める】という関係性を生きることで心のバランスを維持しようとする者もいた。また、信頼できる他者の関わりによって、自分がとらわれていた事柄に気づくことや、見直すきっかけとなり、肯定的な視点に転換でき【自分がとらわれていた苦悩から解放される】といった経験をし、こういった経験をしている家族は、以前は届かなかった他者からの気遣いの言葉を感じとれるようになり、他者との開かれた関係性の中で自分らしく生きる経験を生きていた。

Ⅴ. 考察

終末期がん患者の家族は、患者の死が近いことへの不安と恐怖の中で、必死に他者との関係に壁をつくり、心の安寧を得ようとしていた。このような時期の家族にとって、他者からの不用意な関わりは決して安寧へと導くものではなかった。そういった家族の壁を解き放つものは、慰めや励ましであったり、信頼できる人からの言葉であったりと様々であった。これらのことから、家族看護を行う場合、主となる介護者の関係性の特徴や、個々の家族の安寧を求める方略の特徴を理解し、個々に合った支援を提供していくことが肝要であることが示唆された。